

館長館話実施報告抄 (3)

新野直吉*

1. 石川達三 2. 園部ピア 3. 斎藤宇一郎 4. 多田等観

はじめに

平成11年度の「館長館話」も「先覚記念室」「菅江真澄資料センター」に因む館の活動として8回行った。その中から7月2日(金)石川達三・7月16日(金)園部ピア・8月6日(金)斎藤宇一郎・8月20日(金)多田等観の各回について、文章化した館話内容を報告するものである。

石川達三

明治38年(1905)7月2日、彼は父祐助、母うんの三男として、横手町古川町で誕生した。横手中学校教諭の父は、鹿角郡毛馬内町の旧南部藩士石川儀平の四男で、母ソメは新渡戸稲造とも姻族である家老の娘であった。石川家は毛馬内の素封家豊口家の分家であったが、儀平は天保13年(1842)生まれで、青年期盛岡で家老東次郎に仕え、明治維新後に東が外交官として清国に赴任すると、これに従った。一時帰郷して毛馬内戸長の職に就いたが、貿易などの事業に失敗して25年東京に移住した。子女の教育に熱心で、長男伍一は若くして清国語を学び軍関係の仕事をし、日清戦争に際しいわゆる軍事探偵として天津城外で銃殺されたことで有名であり、次男寿次郎は海軍中佐、五男漣平は陸軍中将である。長女ミキの子種市喜六も海軍少佐などと軍人が多く、四男祐助の長男晋も陸軍大佐になる。なお祐助の弟で六男の六郎は国民新聞編集局長・朝日新聞学芸部長などになるジャーナリストで、妻は徳富蘇峰の娘だという。

横手高校蔵の明治40年の祐助の履歴書等によると、彼は明治7年(1874)2月15日生まれで、同23年東京英語学校・25年東京専門学校・27年国学院と学び、28年応召近衛第一聯隊に入り台湾に出征、30年高等師範学校臨時英語専修科に入り、33年卒業して秋田県第三中学校教諭に任ぜられた。第三

中学校は34年7月に横手中学校と改称、37年6月秋田県立横手中学校教諭に任ぜられた。そして達三が数え年3歳(満1歳8ヶ月)の40年3月30日付で秋田中学校教諭(10級俸720円)に転任した。

榎山本新町(もとしんまち)上町(かみちょう)35番地に住み教頭であった。達三は「榎山裏町」と記憶し記述しているが、それは榎山を表町と裏町と呼んでいた名称であろう。昭和42年9月町名変更で南通築地185番地になっており、住居表示では南通築地15番である。明治44年6月19日付で祐助は9級俸825円となり、10月従七位となった。しかし校長と意見を異にし、明治45年1月29日休職し、3月1日依願退職した。

この年4月に築山小学校に入学したばかりの達三も、5月31日父の上京に従い離秋し東京府大井町小学校に入った。田舎からの転入生として都会の小中学生とは馴染めなかったらしい。しかも間もなく父は9月に岡山県上房(じょうぼう)郡高梁(たかはし)町の松山城本丸跡に建つ県立高梁中学校の英語教師(教頭)に赴任することになり、平田篤胤が江戸詰藩士でもあった松山藩の故地に一家は移住した。在京中に一番下の弟も生まれていた。さらに翌々大正3年には、2月に一番下の妹も生まれたのに、12月に30代半ばの母うんが死去した。彼が最も憧れた女性でもあった。角館で武家屋敷としてもよく知られている青柳家とも親戚である元武家の地主栗原家の出で、栗原家は達三の作品『三代の矜持』で舞台久原家になっている。うんは第二高等学校生針生久太郎と結婚したが、若くして夫に死なれ、達三たちの異父姉イナを針生家に残し、石川祐助と縁あって再婚したのであった。達三は母に似た「きれいな」(『私ひとりの私』の表現)姉イナを慕っていた。

子育て最中の妻を失った父も困り果てたであら

*秋田県立博物館

うが、子供達にも悲劇であった。12月中旬に、軍人の叔父に引取られる弟と共に、自分はそのもとに預けられることになった叔父六郎に従い上京した。達三本人は9歳6ヶ月から10歳1ヶ月まで東京市外荏原(えばら)郡平塚村戸越(とごし)で養われ、戸越小学校に学んだ。現在の品川区で、当時も大井と同じ郡内であったけれども、こちらはまだ農村の性格が濃く、農家の子供と楽しく相撲を取り成績優秀な学童として暮らしていた。

しかし7ヶ月たった大正4年(1915)8月4年生の彼は父に連れられて高梁に帰った。父が再婚し家庭生活が可能になったからである。継母のせいには女学校の教師で先妻の7人の子を世話するクリスチャンであった。そして即位の大典の行われる頃に女の子を生んだ。継母の母と姪が同居していたので12人家族になり家計は楽ではなかった。東京に出る前もそうであったように、彼は4年生から5年生になる時も首席だったが、低学年からそうだったように副級長であった。2番か3番の柳井という中学校長の息子が級長だったからだという。5年になった春上の兄が中学3年から大阪陸軍幼年学校に合格入学、彼は兄を誇りに思った。小学校卒業も近い頃、毎食胡麻塩飯を食べた結果、腎臓炎で病臥し一ヶ月も西瓜糖を服用した。まだ恢復期に東京の叔父から府立一中受験をすすめられ、上京試験に応じたが体調不十分の地方小学生に秀才校の受験技量はなく、得意の国語問題への良心的疑問から躓いた。帰宅しても高梁中学校の入試には間に合わず、高等小学校に入った。彼は「屈辱の一年間」だったと書いている。その作品にも顕著である「不屈」の性格が一層磨かれたことであろう。大正8年(1919)4月数え年15の彼は父が教頭の県立高梁中学校に入学した。150人中12番だったという。長兄は陸軍士官学校に進み東京にいた。10年父は高梁中学を退職し、改めて岡山市郊外の私立関西中学に勤めることになる。

達三は一人高梁町の菊村という醤油醸造の素封家に預けられ、同家の子息が小学校からの学友だったので、共に成長することになる。トルストイ・賀川豊彦などを読み、小説にも手を染めたという。修学旅行で江田島を見学し海軍にも憧れた。

しかし大正11年4月両親は彼を関西中学に転校

させた。県立から自身「不良中学」と書くような中学に移ることは抵抗もあったようで不運にも見えるが、彼が「恥知らずな行為を私もすることが出来た。やってみれば何でもなかった。何でもなくやれるというところに、自分を解放することの危険性があった。私は自分で承知のうえで不良学生のまねをしていた。しかし、私自身は、決して本当の不良には落ちないことを知っていた。私にはそういう素質が無かった。それは私の家系、私の育てられた家庭、そして兄弟たちによって培われてきた環境が、或る種の厳格なものを持っていたからであった。それがもはや動かし難い私の骨格となり血液となっていることを、私は信じていた」と『私ひとりの私』の叙述を結んでいるのを見れば、関西中生活も石川達三にとって無駄やマイナス体験ではなかったのであろう。

大正13年3月数え年20歳の彼は中学を卒え、第六高等学校を受験したが失敗し、1年間の浪人生活中に、ゾラなどの作品に親しみ、詩や小説を書き、受験雑誌に投稿し入選したりして、新聞記者や小説家を希望するようになる。大正14年(1925)4月早稲田大学第二高等学院に入学し、牛込の長兄の下宿に同居し自炊で通学し同人誌を創刊し作品を発表する。だが経済的には苦しく、学部進学も諦めざるを得ないかというような状況であった。

大正15年夏、活字になった最初の作品「寂しかったイエスの死」を岡山市の『山陽新聞』に発表し、翌昭和2年(1927)『大阪朝日新聞』の懸賞小説に「幸福」という作品で応募入選し、200円の賞金を得、これを学費に4月早大文学部英文科に入学した。翌年3月結局退学するが、早稲田大学創立90周年記念講演会(昭和47年10月)の「校友」としての『早稲田と私』という講演で「私は中退で、三年しか勉強できなかったが、大学が嫌いになって辞めたわけではなくて、学費が無かったので残念ながら辞めたわけで、その分だけ未練が残っており、そのために、かえっていつまでも気持の上では縁が切れないでいる」(あきた青年広論「石川達三アルバム」)という通りであったのであろう。5月国民時論社に入社し、電気業界誌の編集に従い昭和5年(1930)3月退社する。

いよいよ大転機となる移民船「ら・ぶらた丸」

で当時「伯刺西爾」と書かれたブラジルに渡ることになる。米良功所有のサント・アントニオ農場に約1ヶ月滞在の後、上地旅館に宿泊、日本人農場を体験して8月に帰国した。国民時論編集に戻りブラジル紀行文を雑誌に連載する。同7年嘱託待遇になり、「モダン・ダンス」なる舞踏雑誌編集を半年して、「一九三〇年三月八日 神戸港は雨である」の書き出しで知られる『蒼氓』の第一稿を書き、翌年手を加えて、「改造」の懸賞小説に応募佳作となり、そして昭和10年(1935)数え年31歳で4月同人誌「星座」創刊号に「蒼氓」を発表した。現在の第一部に当たる部分である。

これで8月に『第一回芥川賞』を受賞するという画期的な栄光を獲た。勝田・門間両家族を中心に彼らの苦しさや悲しさを描いているこの小説は、10月に改造社から出版され揺るぎない文壇の地位を占めることになった。翌年11月には梶原代志子と結婚、中野区道玄町に居住する。作品も豊かに諸誌に掲載される。12年8月には長女希衣子の誕生があり、10月には小河内ダムに沈む村を描いた『日蔭の村』を新潮社から刊行する。戦時になり12月中央公論社の特派員として当時「中支」と呼ばれていた戦場に赴き、翌年正月まで滞在した。1月帰国して11日間に330枚を書いたというが、検閲もあり80枚ぐらいになったという「生きている兵隊」を、昭和13年3月に『中央公論』誌に発表した。奉天から大連を経て南京攻略に向かう部隊の兵士が理性も感情も麻痺して行くさまリアルに描いた。同誌は即日発禁になり、作者と発行責任者は起訴されて9月に新聞紙法違反・安寧秩序紊乱の罪で禁錮4ヶ月執行猶予三年の判決を受けた。一層の存在感を示し9月中旬から武漢作戦取材に1ヶ月中央公論社から特派された。11月に新潮社から出版した『結婚の生態』はベストセラーになった。この中で「私の血の中には東北人の不屈の根性がある」と述べる。「武漢作戦」が発表されたのは翌昭和14年1月の『中央公論』誌上であった。

昭和15年(1940)2月『転落の詩集』、6月『三代の矜持』、9月『武漢作戦』、12月『母系家族』などの話題作が次々に刊行され、16年には5月サイパン・テニヤンなど南洋群島をめぐる「航海日誌」

以下の作品を発表したが、年末いわゆる太平洋戦争の勃発で、陸軍に徴用、直後海軍報道部の所属に変更され、17年1月捕鯨船でサイゴンに赴き、当時の仏印を初め南方諸島をも廻り6月末帰国、「仏印進駐誌」を執筆したが、ペナン島上陸の際デング熱に罹るということもあった。同18年8月「日常の戦い」を毎日新聞に連載し始めた。9月には長男が誕生した。そして19年に数え年40の彼は1月に本籍を毛馬内から東京に移した。9月「学識は充分にあるのに」「処世の才というものを全く持たない男だった」(『私ひとりの私』)と辛い評価をしていた父祐助が世を去った。

昭和20年(1945)8月、文士たちにも種々の陰鬱をもたらしていた大戦が敗戦で終わった。彼は早速12月に、自ら「この作品が原文のままで刊行される日があるとは考えて居なかった」と述べる『生きている兵隊』を河出書房から完全な形で世に問うた。長年の念を達したことであろう。新時代に意欲と自信を持った如く、21年4月衆議院議員の選挙に日本民党から立候補したことが知られているが詳細には資料が伝わらない。落選したからであろう。22年には元軍人を主人公にして「望みなきに非ず」を読売新聞に連載好評を得た。第一回芥川賞作家になったことは常識的には中学生ぐらいから知っていたが、飛び飛びながら心して石川作品を読んだのはこれが初めてであった。昭和10年段階では読む歳でなかった。「解題」を書く久保田正文さえ「第二部南海航路」「第三部声無き民」の発表は確認していないというが、二部は「長篇文庫」創刊号に昭和14年2月から掲載し、3月の二、4月の三、6月の五、7月の六各号に連載。三部は同文庫第六号に発表された由で、戦時下の受験生が読む機会などはなく、殊に「生きている兵隊」は中央公論三月号に発表し即日発売禁止になったもの故見る筈もなく、また仮に新聞などで『蒼氓』の二部・三部のことを知っても、アブナイ作家の小説と受止めたに違いない。

成人して後の戦後原文版『生きている兵隊』も歴史学を仕事にして文学から遠ざかったので、熟読の機会は持たなかった。むしろ後年韓国に調査に赴いている時に、鳥のいるところにいるという鶺鴒(カササギ)、そして鶺鴒のいるところに鳥がい

ないという話を聞いたりして、「カッチカッチ」と啼いて飛び交ういわゆるチョウセンガラスを見た時、この鳥のことを『生きてゐる兵隊』の中で見たことを思い出した。そこでは九州出身兵士が、この鳥は自分らの方にもすんでいるが、秀吉が凱旋した際ついて来たそうで「勝鳥」と呼んでいる旨書いていたことを想起した。その際勝鳥よりは啼声での「カッチ鳥」という方が妥当性があるなァと感じたことを改めて思い出す。

さらに「風にそよぐ葦」が昭和24年に前編、25年から26年に後編と、毎日新聞に連載されたのを度々読んで石川文学というものを実感した気がした。戦時下の言論弾圧に軍部に抵抗する自由主義者やジャーナリストや文筆関係者を主人公に、戦争未亡人・軍人など多彩な登場人物を扱う6年間の社会小説であるが、自由主義者に思いを寄せながらも、個人的解決では社会全体のことの解決には何の力もない。「考える葦」の人間は「風にそよぐ葦」でしかないという無力感のような「解決なき結末」感も残る作品であった。昭和24年彼は芥川賞選考委員となった。26年にはスイスで開かれた世界ペンクラブに日本代表として出席し、27年4月には日本文芸家協会理事長に就任した。

秋田に来てから読んだ石川作品の中、昭和30年の11月から読売新聞に連載された『四十八歳の抵抗』は主人公が抵抗に失敗する話で、まだ30歳の自分にはあまり共感はなく、社会流行語になった「四十八歳の抵抗」の語の方が心に残った。昭和31年アジア連帯文化使節団副団長としてアジア・アフリカ諸国を歴訪した。教育界に関係ある者として、32年8月から34年4月まで朝日新聞に連載された『人間の壁』は同時性があり関心があった。一条太郎、沢田安次郎、尾崎ふみ子などの「先生たち」は、佐賀に素材を採る小説とはいえ、秋田でも、すぐ近くにや、やや遠くに実在するモデルを見る思いがする作品であった。

そして『文学界』昭和44年11月号から翌年4月号まで発表し、5月に文藝春秋から刊行された「経験的小説論」9で『人間の壁』はいくらか左翼的な小説という印象を読者に与えたかも知れない。しかし私は思想的に左翼でも何でもなかった。日教組という組合は大体に於て左翼的であるが、

地方のひとりひとりの教師を見ると、左翼的な人はむしろ少ない。殊に教育研究集会に出てくる教師たちにとっては、教育という大問題をかかえていて、左翼運動までは手が廻らないというのが実状であるらしかった。私は左翼的でもなく、そうなりたいと望んだこともなかった」と書いていることも心に響いた。要するに彼らしい密度の高い調査に基づき、教育の自主性を教師集団が如何に確立しようとしているかを、教師の生き方の中に見てドキュメント的に表現したのである。

秋田来訪は昭和21年10月、十和田湖を訪れ十和田ホテルに宿り、10日花輪・奥羽の両線を乗り継ぎ秋田駅着で国鉄の管理部講堂で講演し、千秋公園の散策も味わった。また同33年5月に数え年54歳の彼は、仁賀保町平沢中学校で文藝春秋社の文化講演会で、1700名に「女性について」の講演をした。秋田では高清水酒蔵で利酒も体験した。

国際的にも34年には第3回ソビエト作家大会に中野重治と出席した。36年にはアジア・アフリカ作家会議東京大会が開かれ、会長として尽力したし、日本著作者団体協議会長にも就任した。37年58歳の彼はまた男鹿・秋田に来訪した。翌38年田園調布に転居した。昭和39年あの私小説風の「私ひとりの私」を『文藝春秋』10月・11月・12月号に発表文藝春秋読者賞を受賞した。翌年単行本になったが、60歳を数える大作家のこの本は私の心に深く沁みだ。昭和50年代の或る講座で文学史の資料として、『私ひとりの私』と立原正秋の『冬のかたみに』をテキストとした。そういえばこの頃昭和40年に第53回芥川賞候補作品であった立原の作品「剣ヶ崎」について、高見順などが「剣ヶ崎」を推した中で、丹羽文雄の強く推した津村節子「玩具」が受賞作品になった。それについて石川達三は「玩具」の方が巧いとしながらも、「私は『剣ヶ崎』の方を推したかった」といった(武田勝彦『立原正秋伝』創林社)という。『私ひとりの私』と『冬のかたみに』との間には何か通ずるものがあるように感ずる。

昭和44年10月菊池寛賞受賞、46年芥川賞選考委員辞任を表明、47年日本文化研究国際会議の財務委員長を務め、48年日本文芸家協会著作権委員会委員長を辞任、50年6月日本ペンクラブ会長とな

り、51年4月台北での第四回アジア作家会議出席、11月日本芸術院会員となり、52年7月日本ペンクラブ会長辞任などいろいろの経歴の後、昭和53年11月に勲三等の叙勲の栄に輝いた。

昭和59年数え年80歳の10月明德館に原稿・著書などの《石川達三記念室》の設置が彼自身の全面的協力で行われたが、これは58年4月に秋田県青年会館の『青年広論』編集部が幼時の石川達三に縁のある榎山裏町に文学碑を建てたいと申入れたのに対し、「記念室なら協力する」という意向が示されたことに発している。さらにそれも同年1月の同誌20号と4月の21号に「石川達三その1」「その2」を連載すべく、前年の11月に田園調布の石川邸を編集部幹部の田口清克氏と連合青年会副会長の渡辺政幸氏が訪問したことに起因している。郷里秋田の青年の熱意がこの文豪を動かしたのであると私は判断している。

昭和60年(1985)1月31日81歳(満79歳)で目黒区の東京共済病院で急性肺炎で逝去した。

61年1月には31日を中心に3日間、一周忌の「偲ぶ映画と講話の会」が開かれた。秋田市連合青年会の主催であり、遂に《石川達三この地に育つ》の標柱が榎山裏町(南通築地15番18号)に建てられた。6月には未亡人代志子・長女竹内希衣子が、8月には次女芹田希和子と子供3人が来秋して記念室を訪ねた。

『私ひとりの私』の冒頭に「人間は誰しも、他人から完全に理解されるということは有り得ないだろう。誤解されたままで生き、誤解されたままで死んでゆく。結局は孤独なのだ」と書いた石川達三であるが、故郷秋田には「理解され」たのであると館話を行ってしみじみ感じた。そして第三回芥川賞候補作家矢田津世子をふと想った。

園部ピア

聖霊学園の創始者シスター・ピアの来秋以来の偉大さはよく認識されている。平成元年2月発行の『学園史』にも「シスター・ピア」の項があり、同10年2月学園が刊行した『海の星を追って』も「日本に生きたシスター・ピアの生涯」というサブタイトルであり、聖霊女子短期大学では執筆者になる北条常久教授と通訳の横溝真理助教授をピア

の郷里及び居住地など関係するところに派遣してこれまで一般の知識になっていなかった点についても取材した。これら良好な資料に恵まれて自信をもって館話用年譜も作ることができた。

日本に生きたは、一步進めると「秋田に生きた」になるから、いっそう秋田県立博物館の館話にふさわしいということになる。本館話は前年度中に日程と主題が決められているので、模倣した訳ではないが、平成11年7月7日に県立図書館のふるさとセミナーでも「海の星を追って—シスター・ピアの生涯」という北条教授の話があったということで、ここに当館の松田総務課長が親切にも用意してくれたそのセミナー資料がある。この話を聞いて下さる方でも、先週お聞きになった方があると思う。偶然一昨年最初の館話に根本通明博士を取り上げた折も、次の週に『羽嶽 根本通明伝』の著者田村巳代治先生の図書館のセミナーで根本博士の話があったが、その時と同じようにマイペースで私なりの話をしたい。

1930年(明治13)5月29日、ドイツのバーデン＝ヴュルテンベルク州ザールム村のロイトキルヒ教会でアンナ・ハイムガルトネルは誕生の洗礼を受けた。父フリードリヒ・ハイムガルトネル50歳と母ヘトヴィヒ30歳過ぎとの間に長女として生まれた。13歳年上の兄レオポルトがいた。26戸の彼女の生まれた集落は海拔450mの農村であった。カトリック信仰の厚い平和な地域社会ではあったが、父母は土地っ子ではなく、住みついで年数が長くもなかったので十分な耕地は持たなかった。

家庭の平穏は永くは続かなかった。87年2月父は急死した。彼女は6歳、兄は19歳で放心した母は自立性を失ってしまい、村の地区長で幼い女児2人を抱えた亡夫より少し若いビーゼンベルガーと再婚することになった。兄は食事の際以外は独り旧宅に起居し父の遺した耕地を耕すという状態となった。しかし彼女は4歳のカテリーナと2歳のイレネの2人の義妹を愛し、寝室を共にし夢を誘うお伽噺として宗教的な説話を語って聞かせ幸せな姉としての日々を送った。家の直ぐ向いには礼拝堂があり、他の2地区との中間にある国民学校に、学友と一緒に相当の道のりを楽しく通学する生活であった。13歳で高等科に進んだ。

高等科はある時代の日本の実業補習学校のような側面を持っていたようである。14歳の秋にスイス行きについて母の打診があった。当時南ドイツの娘がスイスで重宝がられていたからである。やがて1897年16歳のアンナはスイスに向け国境のボーデン(コンスタンス)湖を船で渡った。さらに汽車でバーゼルに至り、リーエントール通の商人宅に家事手伝いとなり家庭菜園も受持った。

郷里にいた少女時代から信仰心の強かった彼女が求める本は教区の教会であるクララ教会には乏しかった。イエズス会マリーエン教会の隣のボロメオ図書館に良書を求めて通うようになり、広範囲の書籍に触れる機会を持った。特に自分で『聖書』を読むことができるようになる。更なる転機は「孤児院」すなわち身寄りなき子供達の養われる施設の存在を直かに知ったことで、同じ南ドイツの隣村から出て来ているアニータという女性と知り合い、院の奉仕活動をして12月5日の「聖ニコラウス祭前夜」の子供達へのプレゼントの催しをも実行した。6日が聖人の日であるが、ニコラウスはあのサンタ・クロースである。

1897年12月聖マリーエン教会の神父のとりなしで、教会近くのリュトリ通りで奉仕活動に理解のある女性2人の家庭に住み替えることができた。彼女の教会との結びつきは強まり、奉仕活動は軌道に乗った。後年シスター・ピアになる出発点に立ったのである。院に養われていた児も信仰心厚い養親に恵まれると、同じ神の子として明るくなることを知った彼女は「キリスト教の恩恵に浴しない世界にイエスの愛を伝えよう」という宣教パンフレットに刺戟を受けることになった。

ドイツ人のアーノルド・ヤンセン神父のオランダに開いた修道会の「神言会」(男子)と「聖霊奉侍布教修道女会」(女子)が布教活動を展開していたが、アンナは聖職者になりたくて、母の許しを得入金金の根幹になる1500マルクも貰うことができた。「私は子どものころから神様のための仕事、例えば宣教に出かけるというような仕事をしたいという抑え難い気持」を持っていると訴え、1800マルクを添えて入会申請の手紙を書き、1899年9月22日に入会許可を得た。明治32年に当たる。

オランダのシュタイルの聖霊会で生活を始めた

のは11月26日であった。修道女は志願期9ヶ月、修練期2年、有期誓願期6年という順序で修道するのであるが、彼女は志願期6ヶ月、修練期1年半で進級した。1900年6月10日20歳のアンナは志願期を終えシスター・ピア(仁慈の意)となった。翌年12月8日誓願期に入り、4年間教師教育を受けて1905年修練長助手になった。優秀な修道女である。1908年2月3日既に修練長になっていたピアに、日本宣教の命令が下ったのである。

その隊はシスター・ピアを隊長に、教育のシスター・セシリアナ25歳、料理のシスター・プラチダ24歳、手芸のシスター・イレーネ29歳と遅れて発表された看護のシスター・アルメリナ27歳の5名であった。フランシスコ・ザビエルが「未信者の中で日本人より勝っている人々はいない」と書翰で報告した時から評価の高かった日本への宣教を命ぜられた嬉しさから、他言を禁じられていた内示段階にシスター・セシリアナは「ヤーパン」と呼びかけるように叫んだので、修道院内に知れわたってしまったことを、『海の星を追って』は名文で書いている。皆の意識昂揚度がよくわかる。

5月17日の朝27歳のシスター・ピアは終生誓願を許された。出発に際し、北ドイツ出身の他のシスター達はこのシュタイルで家族に見送られたが、彼女はスイスのバーゼルで母と23歳になっていた下の妹イレーネが送ってくれた。イタリアに出てミラノでホテルに一泊し、ミラノ大聖堂で、スイスでよく利用したボロメオ図書館の名の原拠である聖カルロ・ボロメオの墓前でミサを受け、ジェノバに出て5月20日正午頃にゲーベン号という汽船に乗った。ハンブルグ港を出港し日本に向かう8792トンの客貨船であった。6月1日スエズ運河通過、11日シンガポールに寄港、香港・上海で上陸し22日に長崎に寄港(日本最初の港は神戸だとの資料もある)、目的地横浜には明治41年6月28日午前11時頃に入港した。概ね1ヶ月前に28歳になっていたシスター・ピアである。

トラップを降りて「ハウ・アー・ユウ」が誘導係に通じ、先に英語で大丈夫という情報を得ていたこともあって安心したが、糠喜びでポーターにも税関吏にも英語は通せず、日本人の言葉は全然わからず、出迎えた秋田カトリック教会のワイク神

父と、パリ外国宣教会ドノアイ神父およびサン・モール修道会の2人のシスターにドイツ語で挨拶されてホッとす。サン・モール教会はフランスの修道女会で早くも明治5年に横浜で宣教を始めていた。この時メール・マティルドという95歳の修道女さえ横浜にいた。

ワイク神父の秋田教会も、元はパリの修道団体の教会であったのを神言会が引継いだものであったから、いわば協力関係にある。そのサン・モール修道会の横浜紅蘭女学校(横浜雙葉学園の前身)の修道院に、人力車で向かい宿泊することになる。翌29日にはワイク神父の案内で東京見物をし、品川駅でこれから日本語の指導者になる新潟出身の大江キヌが迎え、果物を贈った。彼女は後に結婚し関キヌになる。24歳の彼女は上野まで同行した。上野夜9時発の二等個室寝台車には一行以外の乗客はおらず、ボーイが日本茶の接待をした。チップをと考えるシスター達に、神父が「日本人は誇高い国民で他の施しを極端に嫌う」からと現金を渡してはいけないと教えたので、ドイツチーズ1包が贈られた。熟睡し福島駅で窓外が騒がしく驚いたが立売の声だと教えられ、山形県に入る頃夜が明けた。山々に木がなく大きな(日露)戦争のため伐採されたと聞いた。整然と稲の植えられた水田に日本人の勤勉几帳面さを感じた。

奥羽本線に岩崎鉄橋が架けられ全通したのは明治38年であるから、直通列車で6月30日午後3時秋田駅に着いた。聖霊の『学園史』は「出迎えたのは、教会のマトン神父、伝道師とその家族だけだった。出迎えた人の数が意外に少ないことにシスター達はこれから始まる仕事の前途は厳しいと感じとった」と記述している。人々が珍らしげに遠巻にする中5人は人力車で亀ノ丁本町の茅葺屋根の農家を転用した修道院に着いた。一帯の葦谷地の中で校舎の工事中であった。修道院では小使大野岩松とその母が出迎えた。当夜は生まれて初めて部屋一杯に吊った蚊帳の中でぐっすり眠った。

これまでの東北・秋田の布教の大筋を『聖霊学園七十年史』(昭和53年)の第一章冒頭の『六十年史』の叙述で見ると、安政6年(1859)宣教師再来日以来、関東と函館の双方から東北布教が行われ、仙台・盛岡では明治7・8年頃、秋田では同16年7

月頃からで、米国キリスト教伝道会社のスミス夫妻が秋田に初伝道し、17年春頃からパリ外国宣教会のテュールパン(ツルペン)神父が大田伝道師を伴い来秋、18年広小路の匹田家老邸を800円で買収、米倉を改築聖堂として80余人に洗礼を受けた。20年冬に名古屋に転じたが後任のダリベール神父や新教の諸教会は活発に伝道した。

しかし次のキュソノー神父の23年夏の手紙では市民の反キリスト教行動が悪質になったことが記され、熱心な信者は他郷に去ったと翌年の資料にある有様になる。24年から33年までの10年間に仙台では283人、鶴岡でも158人受洗者がいるのに秋田では僅か9人で、しかも一人以外は幼児と臨終受洗者だけであったという。教会の怠慢ではなく、23年9月キュソノー神父がチフスで斃れたのちにも、業績を持ち他地方で日本人にも敬愛された宣教師が順次来秋したのに9人だったという。

状態を分析した人は「原因は、秋田人が外人嫌いの感情に長くとらわれていた」ことだが、それ以上に「当時、秋田で、せまいナショナリズムと結ばれて活発な動きを示していた仏教青年会や、その他の組織の影響力が強かったからだ」と推測している。他の組織が何かは詳らかではないが、この説のようだったとすれば、一時雨後の筍の如く陸続と来入し各地で受入れられながら、殆どが春の晨の淡雪の如く間もなく消えた外国大学日本校なのに、受入条件を律儀に守って今日まで存続させて来ている現代の秋田と較べ不思議にも思う。

到着し一夜明けた翌日のシスター・ピアたちに関し『海の星を追って』はヴァイク(ワイク)神父が茅葺き屋根の家の小さな聖堂でミサを捧げたこと、昼前に函館からわざわざペルリオース司教が歓迎に訪れたことを述べ、秋田が司教の教区であることと、司教自身が難しい北日本の布教の突破口を教育によって押し開こうと考えヤンセン神父にシスターの派遣を依頼したからであることを示し、それだけに彼女達に司教が大きく期待していたことを述べ、名文で「司教は彼女達に祝福を与え、口づけのために自らの指輪を差し出した」と印象的に書き、ペルリオース司教が経験からも秋田での布教が大難事業であることを諄々と説いて、忍耐の必要性を強調したことを述べ、「彼女

達は、司教のように地位の高い人から祝福され、温かい励ましの言葉を貰う機会が少なかつただけに顔を紅潮させている。しかしシスター・ピアだけは冷静になろうとしていた。ずっしりと責任を肩に感じたのだろう」と北条教授は書く。司教こそヤンセン神父に学校設立を求めた人である。

暫く『七十年史』の所述を追うと、東京浅草の聖パウロ教会で1891年(明治24)7月に「初代函館司教に叙階されたベルリオス司教(秋田では多くの方がベリオス司教と呼んだ)は、北海道および東北地方に、教育事業や慈善その他の事業を盛んにするため、諸修道会を招致した」ということで、その動きの中で司教は96年(明治29)3月ウイーンにフランシスコ会総長マウリツィウス神父を訪ね伴われて、ヤンセン神父に仙台に神言会の学校創設を求めた。プロテスタントは、明治19年創立の東北学院や宮城女学校が米国宣教師によって開かれ、仙台で高く評価されているのに、カトリックはまだ低い評価だからだというのであった。

仙台のフランス人宣教師の意見を求めた上で、司教は同年8月14日ドイツ滞在中のヤンセン神父を再訪し、仙台改め秋田に学校を建て、秋田・山形・新潟への布教を求めた。暫定契約が結ばれ、11月27日にローマ布教聖省から裁可されて発効した。やがて1907年すなわち明治40年9月8日、南ドイツ出身哲学博士のワイク神父、オーストリア人チェスカ神父、北ドイツ出身哲学博士ゲルハルト神父の3人が横浜港に着いた。皆が学校創設に当たるに相応しい教養ある人々であった。

最初神言会日本布教長に任命されたワイク神父が秋田からヤンセン神父に宛てた手紙では、3人は東京・仙台でフランス宣教師に厚遇され、9月15日(第3月曜)秋田に着いた。昔の家老の家と聞き邸宅を夢みて来た彼らは古い黒ずんだ屋根の司祭館で一瞬暗い失望を感じた。自分たちの室に入り寛いでから大笑で失望を吹飛ばしたという。神父たちの失望はシスター・ピア達の失望でもあったかもしれない。マイク神父が秋田で20人ぐらいの信者で「霊交会」なる求道青年会を組織し、秋田で宣教活動していたマトン神父の協力を得て教会に外国語学校を11月30日に開いた。

後に聖霊学園の理解者となる安田忠治という秋

田中学出身の一高生が明治42年夏休にドイツ語の勉強に教会の学校に赴いた際には10人ほどの学生がいたという。ワイク神父は新潟に医学専門学校設置計画があることなどから、そちらに神言会の学校を開き、秋田には聖霊会の女子学校を開いた方がよいと考え、楢山に土地を求めることにした。

曲折を経てマトン神父が交渉して3000坪を4000円で買収に成功した。亀ノ丁本新町すなわち今の南通みその町の地である。マトン神父はシスター達の協力者に、先に新潟布教時に知っていた大江キヌを選んでいたのであった。ワイク神父は2月13日に手に入った土地に、総工費8000円の建物を神言会本部の許可を得て建設することになる。5月6日第一校舎の建築が、請負った職人氣質の平野内大工によって起工された。こういう経緯の段階でシスター・ピア達は赴任したのである。

11月3日幼稚園が開園されピア園長となるが、翌年4月5日開校の私立女子職業学校はワイク校長だった。明治44年本科一期生3名が卒業し、師範科を設置した。在校生22名で1教室授業で済んだ。大正3年(1914)9月3日34歳のピア園長は日本に帰化した。『園部ピア』と命名したのは卒業式に出席訓辞した程の学園理解者秦豊助県知事で、園部はハイムガルトネルによっている。

帰化の動機は、明治43年9月開設の育児部で肉親の養育に恵まれぬ子の養親になる為に、東大法学部の学生になっていた前出の安田忠治に教えられた知識によるものだというが、『学園史』には「日本人を本当に理解するためには日本人になりきることだとの強い思いから」だという。近代世界の物の解釈は西洋生まれの理論に依っており、日本の20世紀も西洋に発した理念での理解や解釈を正道視してきた。その中で園部ピアは日本の理念で日本を理解しようとしたのである。なお彼女には男1、女5の養子が生まれた。

大正4年私立聖霊学院女子職業学校・私立聖霊学院楢山幼稚園と改称した。2年前シスター・ブラチダはフィリピンに転任していた。外国ではないがシスター・アルメリナは金沢聖霊病院に、シスター・イレーネは昭和5年岐阜の幼稚園に転じたという。もちろん5人の修道女の後も何度も来秋の修道女はいた。そして中には退会して聖心

愛子会を創立した人達もある。園部ピアが日本人として努力しているのに第一次大戦のため日独は敵国関係になった。そのため子供らが巷で彼女らをスパイ呼ばわりする程に周囲は酷しくなった。本には「日本人以上に日本人と思いきり日本人になりきって生活していたシスター・ピアには、子供達の罵声がそれに罪がないだけに骨身にこたえた」とある。毅然信念を貫いた彼女は昭和に『教育勅語』が学校に下付された後には毛筆で書写した。自ら修身の授業を担当「良妻賢母」というドイツ語にはない言葉を「良い言葉でございます」といっていたということである。

同12年(1923)定員500の私立聖霊学院と改称。昭和3年高等女学校令による私立聖霊高等女学院となり彼女は院長となる。翌年、成年女子教育の功で鯉沼県知事から置時計を受賞。同8年榊山幼稚園二十五周年記念式典があり、帝国教育会表彰を受け、翌9年には高等女学院二十五周年記念式典を迎えた。13年全国高等女学校長協会表彰があり、日本教学に対するシスター・ピアの宣教の理想は美しく華咲き、大きく結実したのである。昭和14年第二次大戦勃発。日独は同盟関係で創立三十周年記念式典を挙げる。16年7月31日、60歳の園部学院長は辞任、名古屋の本部に移った。

明治41年以来聖霊会日本地方本部は、初代地方長ピア以来秋田にあったが、昭和8年から名古屋市昭和区八事本町に移っていた。なお昭和63年からは管区になり、管区長になっている。終戦後、昭和23年名古屋聖霊学園の創設に当たり学園長になり、その後理事長に就任した。それから5年間28年12月に修道院長として懐しの秋田に戻り赴任するが、短期大学設立の難問を解決しなければならないことになる。見事に設置許可を得て29年7月18日聖霊学園理事長に就任し、11月聖霊女子短期大学開学式を挙げる、30年には秋田市文化章を、31年には秋田県文化功労章を受けた。32年には藍綬褒章を以て国家は彼女の功績に報いたのである。

近代日本の教育は西洋の刺戟を大きく受けて進展した。安政6年ヘボン、ブラウン、フルベッキなどプロテスタントの宣教師がやって来て、その幕を開いたが、明治になると初期からお雇外国人教師の活躍があった。しかしそれは男性教師で、

女性お雇教師の道は閉ざされていた。だから、明治元年から5年まで500人もの米国留学生があったという時期であったにしても、女子留学生には数的に限界があった。4年11月の岩倉大使以下の外交団に女子留学生を随行させるのであるが、それは吉益亮子(16)歳、上田梯子(15)の年齢はまだしも、山川捨松(12)、永井繁子(10)、津田梅子(8)の幼少さには驚く。今風の満年齢で津田は6歳にすぎない。このような中でシスター・ピアは、日本に雇われることもなく、日本女子教学史上の大きな存在になった。生まれぬ幼児にも学恩を与えた。偉大な無償の愛に日本が感謝するのは至当である。33年5月78歳で名古屋に移ることになる。

秋田を立つ朝シスター・ピアがいない。自分の机の下に隠れていたのである。見つけだされて若いシスターに伴われ聖霊学園を後にした。祈りの晩年には養子達に元の戸籍に戻ってもいいと言ったが、6人は園部姓のままにした。一方名古屋のドイツ領事館に帰化の手続きをし、館員に「死ぬからこそドイツ人でなければならぬ」と言った。

昭和38年(1963)11月17日午後4時45分、シスター・ピア、アンナ・ハイムガルトナルは83歳で天に帰った。私物はチビタ鉛筆2本とすり減った消ゴム1個だったという。

齋藤 宇一郎

慶応2年(1866)5月18日由利郡平沢村に旗本仁賀保氏の用人(家老格)である茂介を父に、庄内鶴渡川原の酒井藩士佐藤氏の出であるトキヲ(時尾)を母に、齋藤家の長男として生まれた。4人の姉があり、この後に4人の弟と3人の妹が生まれるので12人兄弟姉妹である。同4年戊辰役では戦火を避けて、母と久保田に避難した。祖父も茂助とあったが、父茂介は後年平沢村長になった。

中世「由利十二頭」の中で矢島と並ぶ仁賀保は、慶長7年(1602)山根館から常陸国武田に移され、最上氏の改易に続く本多正純の領土返上により、元和9年(1623)仁賀保挙誠(たかのぶ)は塩越1万石に転封され由利に戻り、それまでの池田高光の塩越館に入り、高光は丸山館に入った。翌寛永元年挙誠歿し、生前の考えによって嫡男良俊に7千石、次男誠政に2千石、三男誠次に1千石とい

う分知を願っていたのが、寛永3年許可された。嫡男良俊が同8年に死去し7千石家は廃絶、残った両家が旗本として江戸定府で戊辰役を迎えた。

慶応4年(1868)3月13日両家の家老格であった齋藤茂介と遠田清右衛門が、領主の指示で久保田藩主の佐竹氏に勤王を願い出たという。母子での久保田避難も領かれる。齋藤家の勤王心も深甚だったのであろう。彼は幼時藩校久徴館に学んだ。

明治7年(1874)数え年9歳で平沢小学校に入学し、同13年卒え、15歳で私立酒田中学校に入学した。16年3月同校が火災で再興不能となり、山形中学校に転校した。山形から上京17年19歳で東京高等師範学校附属体操伝習所に入学、18年3月卒業して東京山林学校に入学する。彼が出た体操伝習所は19年3月に閉鎖されるが、彼自身はこの19年10月に、山林学校と駒場農学校が合併して出来た東京高等農林学校の予備科3年に編入された。後に帝国大学農科大学林学科になる。

明治23年(1890)25歳7月に林学科を卒業し、一年志願兵として近衛歩兵第四聯隊に入隊した。駒場在学中に入信のキリスト教洗礼を入隊中に牛込教会で受けた。24年二等軍曹に進み、25年除隊12月予備役少尉となる。この頃弟忠一も入信し父親の怒りをかったが、彼は弟の立場を執り成した。翌年9月明治学院教授兼舎監になった。学院は明治10年創立の東京一致神学校と同13年創立の東京英和学校が合併した学校である。28歳だった。

明治27年29歳で佐賀県貴族院議員原忠順の長女ミ子(ネ)と、牛込教会で出会って以来「三年の恋」が稔って結婚した。それは平坦の道程ではなかった。クリスチャンであることに齋藤家と周辺は強烈に反対だったからである。それでも彼の熱意がそれを押し切ったのである。原家は鍋島藩の家老の家柄であった。8月日清戦争で応召したが11月13日には長男豊一が生まれた(この人は平沢町長在任中の昭和6年1月死去する)。28年3月遼東半島に出征し、11月勲六等瑞宝章を受け、12月歩兵中尉に昇進した。

翌29年2月召集解除になると、明治学院を辞職し、4月農商務省に勤務し、短かい役人生活を始めた。明治30年32歳の1月に次男寛次が誕生した(次男は10代で夭折)。そして6月に林務官に任官

したが、翌年33歳の1月に高等官七等となると同時に退官した。官吏は性に合わなかったのかもしれない。2月11日三男憲三が生まれたが、翌32年10月22日父茂介が68歳で世を去ったため、家業を継ぐべく帰郷することになり、翌年2月に乾田試作の奨励をその郷里で始める。必ずしも受入れられない局面もあったが、成果が挙げられなければ損害分は自分が保障するという齋藤の誠実な指導で強い反対も消え、4月平沢町農会長、8月平沢郵便局長になり地元に着して来る。そして9月には四男幸男が誕生した。この人は第二次大戦後仁賀保町長となる。なお平沢村が町制を施行したのは30年である。34年町会議員になり、「明治三十三年度乾田試作報告」を刊行した。翌年「報告」を「成績」と改称し37年度に及んでいる。

明治35年37歳で3月に「平沢在郷軍人会」を組織し会長に推されるが、「帝国在郷軍人会」の成立が明治四十三年の筈であるから実に先行的なことである。この月に「陸軍歩兵大尉」に昇進したと年譜にある。恐らく後備役の教育召集でもあって短期間の軍隊生活をしたものであろう。特務曹長で除隊し民間にあった白瀬轟中尉が、明治30年「後備輜重兵少尉」に任官したのも第二師団で教育訓練を受けた37歳であった。在郷軍人会長は荣誉であった。6月郵便局長は辞任したが、8月に衆議院議員に初当選しより大きい荣誉を得た。

ところがその当選証書が到着した翌々日の8月17日にミ子夫人が31歳の若さで逝去したのである。激しい悲喜交々であったに違いない。教会での恋が実っても曹洞宗の齋藤家がクリスチャンの嫁を受け容れず、漸く3年余の純潔の交際を評価されて、晴れて結ばれ、9年間の齋藤家での生活であったが、末期は病床での生活であった。昭和9年11月発行の堀口宣治『齋藤宇一郎先生』(県社会教育課内秋田県青年教本編纂委員会)には、士官姿の立った宇一郎と淡い色調の裾長の着物で椅子にかけたミ子夫人の写真が載っている。ここの項題は「士君子の恋」である。夫人を「淑徳伶俐の天資を以て学芸諸道に通じて居る」と評している。恐らく結婚記念の写真であろう。そうでないにしても、軍服の袖は少尉を示しているようであるから新婚当時のものであろう。凜麗な容姿が写し出

されている。そして夫人描く日本画の写真も載っているが素人離れした教養の持主である。

謹厳で、若き日学生寮で泥酔怪我をした自戒から酒を吞まず、また熱暑に半身裸でいたのを舎監に注意されてから夏日でも上衣を取らず、扇子も用いなかった。さらに坐しては決して正座を崩さなかったという彼が稀に発する冗談にすら嫌悪を示すほどで、土地の人々もやや近付き難く感ずる高潔な女性であったという。病は胸の患いであつたらしく、子供達は祖母から厳しく禁じられ母の病室に入ることができなかつたという。病床からも選挙中心配りしていたというが、夫の当選を確認「神の御心」に安らかに随順したのであろう。

議員当選後犬養毅らに誘われて憲政本党に入る。12月に議会は解散となり、36年3月再び当選するが、6月『農事視察録』第壹(九州地方)を刊行し農事指導者としての面目を實際に示した。だがまた12月に衆議院の解散となった。なお上記の文献について第壹は、昭和4年10月の『斎藤宇一郎君伝』(斎藤宇一郎君記念会)も、その後の上記『斎藤宇一郎先生』も「農業視察録」になっているが次の段落で見ると第貳も第三も「農事」の文字遣いになっているので、第一だけの不統一を避け、昭和13年の『斎藤宇一郎と農村指導』(武埜三山著・竜星閣)という農事を中心主題にしている本に従って、第一も「農業」ではなく「農事」として、続く録と合致する名称にした。

明治37年3月三度議員に当選し、4月『由利郡平沢町農事調査』を、5月『農事視察録』第貳(羽前庄内)を刊行した。この両資料に関連して大日本農会副会頭からの感謝状を5月16日に受け、愈々農事の大指導者として業績を重ねて行く。7月20日また佐賀県出身の女性を妻に迎える。伏見宮家に仕えた経験を持つ藤津郡南鹿島村田中生一の長女チエである。41歳の38年1月『農事視察録』第参(九州山陽)を刊行。2月平沢共同倉庫を創設、一方戦時・戦後の由利郡産業奨励委員を囑託されたりして産業先達の地歩を確立する。

39年日露戦争時の功績により勲四等旭日小綬章を受けた。40年5月12日長女敦子が誕生し、41年5月22日四度衆議院議員に当選し、10月には会長は県知事の秋田県農会副会長に就任した。42年3

月立憲国民党が創立されるとその黨員になった。4月11日勸農殖産の功により大日本農会総裁から緑白綬有功章を受け、8月には農事や産業組合の発達に寄与した功で郡長表彰を受けた。9月9日に平沢町外三ヶ町村聯合耕地整理組合委員長になる。年来の提言が地域に受け入れられて来た。10月9日大日本山林会総裁から有功銀章を贈られた。

45歳になった43年には、10月14日帝国農会評議員となり、同月由利郡農会長・由利郡地主会長になり、12月19日平沢町外三ヶ町村聯合耕地整理組合会長となる。翌44年2月11日紀元節に帝国在郷軍人会平沢町分会長となり、この月小出村耕地整理組合長にもなる。11月6日、前年ロンドン開催の日英博覧会に、県農会から宇一郎生産の米を出品して金牌を受けたことにより、県農会長の感謝状が出された。農会は昭和18年(1943)に農業会になるまで、明治14年(1881)に、明治初年からの農談会と、農政関係者とによって大日本農会が結成されたが、明治28年(1895)それから分離した全国農事会が、32年(1899)の農会法・33年(1900)の農会令に基き府県農会以下郡・市町村農会が法定団体として設立され、43年(1910)中央組織の帝国農会が成立した。彼はその両者に重視されていたのである。

明治45年5月24日五度衆議院議員に当選したが、あの初当選の年のように6月25日またチエ夫人が夫婦生活9年で逝去してしまう。チフスだった。そういえば明治13年斎藤茂介家は殆ど全員チフスに罹り8月12日宇一郎の姉ナリ(次女)とヨシミ(四女)が同日に死んだということがあった。時代はまだそういう衛生状態の社会であったのである。それにしてもこの悲しさは、信仰深い彼にも大きな悲痛であったに違いない。大正2年(1913)2月立憲国民党から立憲同志会(後の憲政会)に入った。11月には院内村耕地整理組合長になった。そして3年6月1日山形県飽海郡酒田町寺町菊池秀吉の妹ときを娶る。7月農商務大臣杯を受領した。12月また議会は解散になるが、翌年50歳で3月六度目の当選を果たす。4月地方産業功労で藍綬褒章を受け、11月県耕地整理会副会長に就任し、横荘鉄道株式会社社長にもなった。5年4月1日勲三等瑞宝章の叙勲があった。

大正6年1月また衆議院は解散で、4月に七度目の当選を果たした。10月4日帝国農会評議員になり、7年4月には大日本農会総裁から紅白綬有功章が贈られた。9月には内閣から臨時国民経済調査委員に選ばれ、8年2月10日勲三等旭日中綬章を受けた。国政でも由利地方政治でもさらには県農政に於いても活躍し評価されていたのである。そして翌9年2月また解散で5月には八度当選して、8月内閣から馬政委員会委員に任じられた。この時代は馬政は軍馬や農馬それに輓馬などすべての面で馬力が必要で重視されたのである。

大正11年2月には各種表彰を受け、3月に憲政会を退会して同志と革新倶楽部を結成した。八選議員は国政舞台でも重鎮であるが、地方でも絶対的存在になる。11月には小出村外二ヶ町村聯合耕地整理組合長として、16年の尽力に対して組合から金杯その他の謝意表明を受けた。広く輿望が高まれば反作用的に反発も生ずるのが常である。大正8年は5月に町田忠治が報知新聞社長になる年であるが、その4月18日に静岡県内務部長から名尾良辰が本県知事に着任した。佐賀県人である。この知事は齋藤県農会副会長とは農事に関する手法を異にする大脇正諄という農事試験場長兼農務課長をこの年9月に登用した。

秋田県には大正3年4月着任し2年間在職した阪本三郎知事の代に樹てられたという①試験場は試験を専らにする②実行機関農会はその普及に当たる③農務課は両機関を充分監督し重複や矛盾を避けるという《農是》があったという。小島源三郎・川口彦治の2知事の期間を挟むとはいえ、まだ5年しか経っていない。名尾知事の両機関の長を1人とした政策は農会側への挑戦にも見える。

しかも明治4年新潟県北蒲原郡生まれ、29年7月札幌農学校卒業というこの大脇課長は、卒業後母校助教授、31年12月秋田県簡易農学校長、33年秋田県技師という秋田勤務の経験を持ち、35年山口県に転任、37年青森県に移って校長・場長・所長・課長・技師を歴任、大正7年官制の整った北海道帝大実科講師嘱託のうえ翌8年農学博士の学位を得て直後秋田県技師に再赴任した人である。相当の自信家の招致には政治的背景もあり得る。

昭和37年7月刊『齋藤宇一郎を偲ぶ』（齋藤宇一

郎記念会)に記念会会長の伊藤貞七元金浦町長が「先生が県農会副会長として、また農政家としての信望高かりしため、反対政党はその足をさらいたく、大正八年名尾知事は寒冷農法通し苗代を主張する大脇正諄博士を農務課長にすえ、大正四年物故した石川理紀之助翁と同じ主張で齋藤農法に反対されたことは、われわれ農民のはなはだ遺憾としたものです」と書き、さらに大正10年種苗交換会の前に魁紙に2日間無用論を課長が書いたので田夫子の名で反論を同紙に投書したと述べる。

また『齋藤宇一郎と農村指導』に大正9年4月初旬の農会協議会の席上齋藤大脇論争があり、来県して日が浅い課長が本県の試験結果も持たずに他県の成績に基いた奨励をするのは、確実な試験結果による事業指導に非常に支障になる。場長兼課長で博士である人の説に農民は耳を傾け易いので、本県事情を研究の上慎重な態度を望むと要望した齋藤副会長に対し、課長は、試験場の試験結果は農会に奨励してもらいたくない。農務課と試験場とは思う通り指導するし、農会のやることにも県は容喙する限りではない。と応じたとある。

県・郡・市町村から村落にまで系統的組織機関を持つ農会の協力なしに講演だけで対抗する形になった大脇場長の方では、試験成績も良くはなく見学農民の冷笑さえ受けた。試験場無用論も生ずる。でも齋藤は試験場はむしろ拡張すべしという正論を主張する。大脇は八橋の試験場土壌が悪いからだといいい大曲町に移転計画を発表。猛反対が起こり、結局秋田市外の旭川村に移転、南秋の町村は大きな移転負担を蒙った。県農会との対立を町村農民との接近でカバーしようとする課長は、大正11年8月下旬に、齋藤陣営の本拠由利郡に部下の技術者など数十名を引連れて視察に出かけた。

そして『齋藤宇一郎と農村指導』が「当時庁内に於ける大脇博士の勢力は、県知事を凌ぐものがあった。時の由利郡長吉野金之丞氏は、はるばる迎へて自らその案内役に当たった。博士の意を迎ふるに汲々たる技術者たちはまた道々齋藤先生の態度を罵りながら、由利郡の町村を縫ひながら、大名行列そのものであった。先生の生地平沢町を経て金浦から象潟町についたのは八月二十五日である。農事講話をすまして、汗にぬれた旅の衣を脱

ぎ捨てて、吉野郡長と二人象潟の海に入って汗を流したが、そのまま二人とも波に姿をかくして了った」と書く、当世風推理小説の題材に作家が扱ったら『象潟海岸殺人事件』とでも変身しそうな展開になった。郡長の死体はその夜に浮かんだが、必死に懸賞まで出して探した課長の方は27日の暁に波打際に上る迄分からなかった。

この事件について斎藤日記は「八月廿五日 本日快晴軍人分会ノ植林地下苜ニ出掛 今夕大脇課長ト吉野郡長ト兩人象潟海水浴場へ入り溺死セル由誠ニ氣ノ毒ノコトナリ」と平坦に書いていて、下世話的な言辭は日記であっても何も記さない。信仰に徹している日記の主の人柄が行間に漂う。

大正12年も国内的にも地方的にも多くの職務に就き、栄誉を得たが、11月に種苗交換会談話会員一同からの感謝状を贈られ、県農会副会長として16年間の尽力に農会から銀製花瓶が贈られ、平沢町外三ヶ町村聯合耕地整理組合長として15年間の指導力発揮に対し置時計が贈られた。13年も同じような状況が続くが、5月の衆議院選には出馬辞退する。支持者の第三者推薦で理想選挙が行われたが170票の小差で当選しなかった。12月に従来会長は知事だった秋田県教育会長に推挙された。

大正14年60歳の7月平沢町長に就任。10月帝国在郷軍人会総裁から有功章が授けられ、秋田県町村長会長にも推された。ところが年譜によると11月初めから臥床し肺炎として医療を受けることになった。このような状況下で大正15年(1926)2月27日母トキヲ(時尾)が88歳で逝去した。そして4月28日平沢発治療の爲に上京した。平沢町松野・本荘町黒田両医師と夫人・三男憲三・長女敦子が附添った。東大呉内科に入院した。この人のこと故「神の御心のままに」ということであつたのであろうが、5月10日県教育会や横荘鉄道のことを囁言に言いながら午後3時逝去した。12日各界名士参列のもとに牛込教会で告別式があり、夜行で帰郷13日平沢着。15日午後1時平沢小学校で2千余人参列の町葬が行われた。

趣味は読書と乗馬のみの紳士を、同時代の政治家町田忠治が「独り立って影に慚ぢず。独寝ねて衾に愧ぢず」と評したというが、斎藤家の家訓は「家憲＝分を守るべし・処世訓＝功は譲るべし責

任は負ふべし・子女訓＝良心に恥ぢざる行爲をなすべし」で、彼はそれを完全に近く実践した。

多田等観

明治23年(1890)7月1日、南秋田郡土崎港町琴平の浄土真宗本願寺派弘誓山西船寺で、父14世多田義観母タエの3男として等観は誕生した。同35年土崎尋常高等小学校を卒業し、38年秋田県立秋田中学校に入学した。43年卒業すると、彼の直ぐ下の弟が小学校を卒え京都に出て、西本願寺大谷光瑞法主のもとでいわば英才教育を受けていたという状況だったので、自分も上洛して西本願寺に入山した。数え年で21才の時である。上洛には彼の親友である山王丸小四郎が京都で銀行に勤めていたことも一因であったと等観は言っている。西船寺には、それまで2代の杉孫七郎県令を除けば代々権令であった秋田県の長官では、最初に県令になった石田英吉の発願によるという一切経蔵があるというから仏教学の雰囲気は漂っていたのであろう。彼が土崎を出る時火事で蒼竜寺が燃えていたという。京都ではアルバイト生活だった。その彼が光瑞法主の命令で、西藏(チベット)ドライ・ラマ13世の使者ツァワ・ティトゥー(ツァワ・トベック)僧正と従者2名の世話を命ぜられた。この3人と六甲の家で約一年間一緒に暮らす。日本語を教え西藏語を習う生活でもあり、将来西藏学者になる因縁が生じた。法主と僧正等が会見した際、西藏人の話す日本語が純秋田弁だった為に京都弁の法主側には通ぜず、その為日本語教師は更迭されたが、生徒1名に教師3名の西藏語教育は継続したので彼の会話力は増し、日本語新教師を好まない3人の日本語力は進まない。そこで、専ら西藏語で用を達することになった。

日本と西藏の間に国交はなく、彼らは表向き蒙古人という触れこみで来日していたらしい。明治30年代半ば英国の圧力下ドライ・ラマ13世は清朝の西太后に北京紫禁城に招待されたことがあり、その際に北京日本公使館も13世を招待林権助公使も厚遇した。さらに13世が山西省五台山に行く途次に、大谷光瑞が代理として派遣した弟の尊由が会見し、留学生交換の話が出たという。この前提のもとにツァワ・ティトゥーは遣日されたのであ

るから、本人は知らないが、法主はこの秋田人青年を異境に耐え得る留学生候補に擬していたのかもしれない。そもそも西藏仏教は印度から直接伝わった仏教で、西域経由で中国へ、そして日本へと伝わった仏教とは別であった。そして外からはラマ教と呼ばれているが、仏教そのものである。

ラは上、マは人ということで、ラマは上人である。サンスクリット(梵語)のグルと同義だというのが、ドライは蒙古語で海の意で、3世のドライが蒙古に旅した際蒙古人が尊崇して徳が海のように広大だとドライの尊称を奉ったものだという。その2代後の5世ドライ・ラマが国王にもなり、西藏でドライ・ラマは政治と宗教の王者となった。それだけに英国の侵入とも進出とも言える行動を受けると、13世は明治33~34年と同40年代前半に2度蒙古に亡命したと多田等観『チベット滞在記』(白水社)には記されている。

この国際状況下13世は同じ仏教国だと大谷がいう日本に親近の縁を感じたのであろう。西藏に行くことになったのを、「なあに、成りゆきさ」と等観は間に答えていたというのが、総体として歴史の成りゆきでもあった。明治45年秋田人多田等観は帰国するツァワ・ティトゥー師らを送る命令を法主から受けた。同行するのは、法主の弟子で側近の青木文教と梵語研究家の藤谷晃道であった。印度に着き、使節僧正を送ってシッキム国境に近いカリンポンの行宮で13世に謁見し、トゥブテン・ゲンツェンという西藏名と西藏に入る許可を得た。トゥブテンというのは13世のトゥブテン・ギャムツォという名前の一部を与えられたものであった。数え年23歳の日本青年が西藏風の礼拝挨拶ができ西藏語を喋ったことが、13世の喜びだったのであろう。それに13世の知りたい中国情勢を等観の手許に届く日本の新聞の解説奏上が評価されたという。2ヶ月ほどで13世が、帰国したのち、彼はネパール寄りの気候の良いダージリンに移り小さい家を借り、西藏人の召使1人と生活し、13世が残したホルカン・ザサというラサの貴族から正しい西藏語を学んだ。13世はチドゥン・ロトゥという僧侶役人の連絡係も置く配慮も示した。一方大谷法主からは早く入蔵勉強せよと指示が来る。既に青木は1年前に入蔵していたが、英国官

憲は彼の越境を警戒し巡査2人を配備していた。そこで母の病気で帰国すると偽り、先ずカルカタに南下した。陽動作戦である。

ネパール人に扮して列車で北上し、さらに西藏僧に変装し英国人も入らないという殺伐なブータンの国境通過に成功した。しかしブータン兵と英国兵とが自分の手配写真を手にして見、牛小屋に泊まったり、靴を怪しまれない為に裸足で岩山路を歩いたり、後年弟子達にも経路を語らなかつたような苦難の末、標高6500mもある呼吸困難の峠を血だらけの足で越えた結果、9月28日24歳の等観はラサに達した。国境を越え西藏領だから万能だと信じた13世に貰った旅券は余りに高貴特別で風体に相応せず、信用されない。馬も借り得ぬ状況下での楽天的若さの奇跡的成功だ。

青木は街中で優雅に貴族邸に住んで勉強していたのに、彼は僧侶として寺院で学習することを命ぜられる。入国挨拶にツァワ・ティトゥーの離宮内住居を訪れた際、ドライ・ラマの侍従長兼侍医から13世の意志として伝えられ、更に直接の説示もあった。僧侶7700人のデーブン寺・5500人のセラ寺・3300人のガンデン寺の管長たちの当初の拒否姿勢も、13世の「日本も仏教国だ」という説得で氷解し、逆に自寺修学を求めようになった管長たちが13世の指示で西藏流に骰子によりセラ寺と決めた。13世から130円の手当をお手許金から下賜されての入寺であったが、国から持参した金は2年程で無くなり、親からの仕送りを受け、日本の金襴も送ってもらい13世に献上したという。特に日本の新聞が届くとそれからの国際情報をドライ・ラマに奏上して伝えることは喜ばれた由。西藏仏教の寺には学問僧と職務僧との二つがあった。勿論彼は学問僧で3年で博士・ゲシェーに次ぐチュンゼの席を与えられ立派な学僧になった。大衆の面前1時間も論議をし認められる試験にパスしたわけであり、宗教上の比丘の戒律も観音菩薩の化身活仏と信じられているドライ・ラマから受けた。西藏には次の高僧パンチェン・ラマもいて阿弥陀如来の化身とされている。シガツェにあるタシルンポ寺の法主のことをパンチェン職ということからこの称号があり、大正11年春に当時のパンチェン・ラマ7世に等観は会ったが、やはり

非常な親日家だったとっている。現在もドライ・ラマ14世は中国政権との対立で国外亡命生活だが、13世の時代にもパンチェンラマ7世は中国政権に取りこまれており、結局中国で客死したという。両高僧ラマは転生が信じられている。

大正4年日本人4人のラサでの新年会があった。青木文教・河口慧海・矢島保治郎と彼がその4人である。青木は上述の如く印度から13世を追って彼よりも先にラサ入りし、効率的に西藏語学や風俗・習慣の研究をし大正5年1月帰国した。『西藏遊記』などを著している。河口は『チベット旅行記』で有名で「山口」の名で小説の主人公にもなっているが、黄檗宗改革の志破れ原仏典を求め明治34年ネパール経由で西藏に入った。最初に入蔵した日本人で、ラサで若干の寺院生活もしたが、ペトゥ・アムチ(ペトゥという名の医者)と呼ばれて重宝がられた。やがて外国人らしいと気づかれて身の危険を感じ印度に脱出帰国し広く名を知られた。大正3年8月彼のいる西藏へ再入国に成功。3ヶ月程ラサに滞在語学の修成や一切経将来などの目的を達し4年1月帰国した。『第二回チベット旅行記』(講談社)には「多田師は日夜チベット仏教を研究して、学僧の間に異彩を放っている」と記し日本語での会話を快事だったとっている。後に大学教授にもなる。

そして矢島も、前年揚子江を遡って明治44年3月から1ヶ月程ラサにいたが、世情騒がしくヒマラヤ越えて印度に脱出帰国した後、45年7月再びラサ入りした冒険旅行家だった。等観は、西藏女性と結婚し経済的に苦しい彼を13世に親衛隊指揮官にと推挙したと伝えられる。3人中一番長く在蔵し大正7年10月帰国した。帰国後も2人の友情は続き、昭和10年前橋で撮った多田と矢島の共に私服姿の写真もある。4人のことなどは明治という時代思潮や当時の日本の西藏への関心の深さを示すが、大正後半になると結局3人はそれぞれ帰国し、わが等観独りが寺院の修学を続け学僧生活を定着させていた。滞在長期だけでも価値がある。

その上河口の描写のように刻苦し、幾段階も経て哲学や戒律を身につけ密教も学んで大正11年にはゲシェー(博士・大僧正)の学僧位を外国人で得るという稀有の成果をおさめた。翌12年(1923)

数え34歳の彼は13世に帰国の許可を求める。惜しんだ13世は80頭の驢馬の列で典籍その他を贈った。3月13世直接の旅券と国費により帰国の途に就いた。輸送の隊列は堂々印度に至り、カルカッタから船積みされ5月神戸港で陸揚げされた經典などは、彼が「狂人みたい」と自認する買い方をした本と13世から与えられた仏典など2万4279部で、後年弟子達に「玄奘三蔵よりもおれのほうが持ってきた」と「いばっていた」と北村・山口・大鹿3教授の座談会記録にあるが、それも宜べなる哉で語学・暦学・天文学などにも及ぶ厩大な質量であった。間もなくの関東大震災で13世は心配したが無事だと返事をすると、「お前は日ごろラマを大切にすから」といって来たという。

翌13年東京帝大文学部嘱託になり招来文献の整理に当たり、14年36歳の8月東北帝国大学法文学部職員となり、15年4月島地大等の世話で山田菊枝29歳と結婚、仙台市霊屋下に住み昭和2年長女文子が生まれ、やがて次女千枝子三女明子も生まれる。子煩悩であった。昭和7年までに5回も転居したという。同8年44歳で関東軍と交渉をする蒙古側が相手としてドライ・ラマ重用のトップテン・ギャルウェンなる日本人を指名し、彼のことと分り俄然世の注目を浴び、7月大連の夏季大学で「満州と西藏を貫く精神文化」の講演をした。熱河・内蒙古等を旅し、当時の溥儀皇帝や13世代理人とも会い12月帰国した。満州、北京と回送された13世の懇書を帰国した彼が手にしたのは、13世逝去後のことであった。9年『西藏大蔵経総目録』が、10年『西藏大蔵経総目録索引』が、東北帝大で宇井伯寿・鈴木宗忠・金倉円照らの協力で編まれた。昭和10年46歳を数えた彼は東北帝大講師に昇任し、12年5月仙台的彼の許に13世の遺命により『釈尊絵伝』が届いた。9月24日『河北新報』は「秘密国西藏から六百年前の仏尊絵…東北帝大 多田講師へ寄贈」と報道し、「こんな素晴らしいものは又とありません」との講師談を伝えた。絵は戦時花巻に疎開する。

昭和15年聞き書き稿が出来岩波新書刊行の運びとなったが、面白過ぎると周辺で削除し無味乾燥になった由。16年2月蒙古聯合自治政府主席徳王が<蒙古碑>視察に来仙、ホテルで26日朝等観と

会談した。そして17年3月東北帝大を辞職上京し、慶応大学講師になる。数え年53歳で慶応大の外語研究所・亞細亞文化研究所などに関わる東京生活となるが、昭和20年7月岩手県花巻町上町の弟鎌倉義藏住職の光徳寺に疎開。22年8月湯口村観音山円万寺に観音像寄進、境内に一燈庵が建てられ転居。太田村山口に疎開していた高村光太郎と親交。村人にも愛され23年には郷倉解体材で経蔵造られた。21年に東大講師にもなっており講義には妻子の住む千葉県市原町から通ったが、一燈庵に長期滞在もした。そして24年2月になる。

米国スタンフォード大学がチベット講座に招き西藏大蔵經の譲渡を求めた。生家西船寺に置いた21箱4500部以上の典籍が進駐軍の手で運ばれた。だが米側は25年12月アジア文化研究所教授にするから大蔵經を持って来いとなお要求し、数え年62歳の彼は26年6月30日19箱の文献を持って横浜を船出した。「殻に閉じ込められている日本仏教を世界の仏教に発展させたい」と言っていたが、引き止めたかった弟子達は実は生活の為だったと語っている。米国ではもっと日本に残してある文献を送らせろと催促を続け、花巻では支持者により光徳寺境内に古い経蔵から移した資料を納めるく蔵脩館が造られていたのに、27年12月にはその花巻から『ラサ版大蔵經』まで送り出された。

大蔵經が到着半年後研究所は閉鎖され居場所を失った。学生達が「先生の資料が奪われてしまう」と秘かにサンフランシスコの日本領事館に運び、日本の商船が無料で資料を日本に輸送したと言うが、米国にも残置された由である。締め出された形の彼は空しく28年11月に横浜に戻り着いた。

彼への理解が乏しかったとも評される東北大学だが、同輩後輩により続けられていた研究でこの28年5月に『西藏撰述仏典目録』を刊行していた。昭和30年多田等観は、これによって羽田野伯猷・金倉円照・山田龍城3教授と《日本学士院賞》を受賞した。日本の学界も東北大学の研究協力で遂に西藏学者多田等観に光を当てたのである。

31年67歳にして大正6年に三菱が設けた東洋文庫の研究員になり、優れた弟子の育成に当たる。米国ロックフェラー財団が36年にチベット学研究センターの設立を援け、「歩く辞書」等観が主任研

究員になる。日米が権威を認めた彼だが何日も研究所を留守にして日本各地を歩き、多くのファンを得たという。市原の自宅には月に1, 2回戻るだけで、文庫近くの駒込で六畳一間に独り下宿した。秋田県東京宿泊所の三浦勇一郎管理者が訪ねたら室の押入の中で読書をしていたという。

牧野文子聞き書きの、多田等観『チベット滞在記』の巻末「多田等観先生を語る」座談会で、教え子の教授達は先生を「ほとんどチベット人でした」といい、「チベット語でいえばニヨンバダ」と評している。天衣無縫の聖者で常識では律し得ない存在の意である。昭和41年(1966)11月3日数え年77歳で勲三等旭日中綬章を受けた。

晩年望郷の情でか上野駅近い県の東京宿泊所をよく訪ね、42年2月7日も此処で酒を楽しんでいて倒れ、東大病院小石川分院で18日逝去した。78歳(満76歳)であった。<蔵脩館>保管の資料は、平成6年4月花巻市に寄附された。近く市は博物館を建て所蔵・展示する予定だと仄聞している。慶ぶべきか。秋田に無きを悲しむべきか。嗚呼。

西本願寺門主染筆の知蔵院の院号を備える釈等観法師の墓所は生家西船寺にある。心安らぐ。

平成11年秋日、東北歴史博物館での会議の帰途元蔵脩館の建つ光徳寺を写した。そしてふと愛知県吉良町でその前に佇立した白瀬中尉の山林中の墓碑を想った。

光徳寺 (岩手県花巻市)



白瀬中尉墓碑 (愛知県吉良町)

